

研修先：ラオス ヴィエンチャン事務所
研修期間：2006年8月1日～8月27日

氏名：吉川いずみ
所属：桜美林大学 国際学部

研修テーマ：「学校以外での教育の場のひとつとしての図書館活動の位置づけ、また活動が子どもたちに与える影響、その必要性について」

研修テーマの研究を、できるだけ多く子どもたちと触れあいながら行いたいと考えていたため、活動の中心は主に SVA に併設されている子ども図書館であった。それに伴い、SVA が毎週火曜日に行っている移動図書館や、土曜日のタートルアン広場への移動図書館にも参加させてもらった。ほかにも、「ラオスのこども」や“peuan mit”へ訪問し、スタッフの方にお話をうかがい、ほかの NGO が行う活動についても知ることができた。また、研修の最後には SVA の youth volunteer のホームステイキャンプにも参加させてもらい、youth volunteer の活動については、もちろんのこと、ヴィエンチャン内でもまだまだ本と触れ合うことが無い場所があるということも、身をもって学ぶことができた。

以下で、各場所での活動についてそれぞれ述べ、最後にこの研修を通して学んだことをもとに、研修テーマについての結果を述べたいと思う。

SVA 図書館

SVA 子ども図書館 SVA ラオス事務所の 1 階に併設されている。火曜日から土曜日の 8 時半から 16 時半まで開かれており、子どもたちが自由に出入りすることができ、図書館には図書館事業のスタッフ 1 人が常駐している。

図書館に置かれている絵本について

子ども図書館には、ラオス語の絵本のほかに、タイ語、英語、日本語の絵本にラオス語の訳を貼った絵本が置かれている。その理由として、ラオス語の絵本の出版の少なさがある。ラオスには、本の出版社が 1 つしかなく、そこから 1 年間に新しく出版されるラオス語の本は約 50 タイトルほどしかなく、それらだけでは十分ではないためだ。ラオス語で書かれた本の少なさは青年図書館においても言えることであるが、青年図書館に置かれて

いる本は、訳などはつけられず、ラオス語のほかに、タイ語と英語の本が置かれている。

以下の表は SVA 図書館（子ども・青年）の絵本の数を言語別にしたものである。

	子ども図書館	青年図書館
ラオス語	1950	1273
タイ語	1397	5500
英語	199	1295
日本語	784	
計	4330	8068

表からもわかるように、ラオス語で書かれた本は全体の半分以上である。子どもたちがラオス語で書かれた絵本を読む重要性は大きい。言語の問題だけでなく、絵本にはその国の昔からの習慣や文化を伝える役割がある。SVA 図書館に通ってきている子どもたちにインタビューを行ったところ、ラオスの伝統的な物語から昔の人の考えを知ることができるから好きだと答えている子どももあり、ラオス語絵本の重要さを感じた。

しかし、また私は同時に英語や日本語で書かれた絵本の重要さもあるのだと感じた。それは、ラオス語の絵本と同じように、外国の絵本から違う国の文化を学ぶことができ、新しいことに興味を持つことにつながるからである。実際に子どもたちの中にも日本の絵本が好きだという子は、大変多く、またそこから日本や日本語に興味を持ったという子もあり、うれしく感じた。

図書館での活動

すでに前に述べたが、SVA 図書館は火曜日から土曜日の 8 時半から 4 時半まで開かれており、子どもたちは自由に利用することが出来る。利用することは自由であるが、本を借りるためには、会員になる必要がある。以下は 2005 年度の子ども図書館、青年図書館の利用者数である。

	子ども図書館	青年図書館
利用者数	15,252	16,223
会員数	636	1,952
本を借りた数	3,249	12,868

借りられた本の数	6,956	24,338
----------	-------	--------

私が研修を行った8月は夏休みだったため、毎日多くの子どもたちが図書館を訪れていた。青年図書館では、利用者は長時間滞在するよりも、本を借りて帰るほうが多かったのに比べ、子ども図書館では1日中図書館で過ごす子どもも多かった。ほとんどの時間、子どもたちは本を読んだり、友達と話したり、と自由に過ごすのだが、図書館のスタッフが工作や、ゲーム、読み聞かせなどその日によってやることを変えながらアクティビティーを行っている時間もある。

おはなし会

土曜日は、SVA 図書館でおはなし会といい、午前と午後にアクティビティーが行われている。午前は工作を行い、午後はユースボランティアによる、ゲームや読み聞かせ、また歌を歌ったり、スライドの上映などが行われている。平日の図書館よりも、多くの子どもたちが集まり、より一層にぎやかな時間となっていた。

ラオスの小学校では、音楽や図工といった子どもたちの表現力を磨くような授業が、(子どもたちに聞いたところによると)最近では学校でも行われているということであるが、それはヴィエンチャンであるからなのであると思う。また、そのような授業は行われていても、日本で言う音楽会や学芸会、展覧会のように学校の行事でそれを表現する場所はないという。SVA 図書館での毎日のアクティビティーは、人前で自分のことを表現する場面を与えている。その子の持っている才能なのかもしれないが、地元のテレビでのインタビューが jicafe で行われたとき、緊張などまったくなく、あまりにも堂々と話をする子どもを見たときは、SVAでの成果ではないのかと感じた。子どもたちにとって、自分を表現するということは、その子の持っている才能を発見することでもあり、また新しい興味を持ち、子どもの持つ世界を広げることにもつなげるのだと思う。

以上、私が研修中に見たSVA子ども図書館での大まかな活動である。SVAの図書館に来る子どもたちは、ヴィエンチャンに住んでいる子どもだからであるのだろうが、ラオスでは比較的裕福な家庭の子どもが多いように感じられた。もちろん、それは服装や持ち物で私が判断したことなのでハッキリしたことはわからないが、全体を見てもあまり貧しい子というは見なかった気がする。しかし、ラオスの中で裕福なヴィエンチャンであるとはいえ、ストリートチルドレンのように貧しい子どもたちも存在する。そのような子どもたちをはじめ、もっと多くの子どもたちにSVAの活動を広めていく必要があるのだと感じた。なぜなら、1ヶ月という短い時間での研修であったせいもあると思うが、通ってきているのはほとんどが同じ子どもで新しい子どもを見かけることは少なかったように感じたからである。

また、図書館では毎日のように通ってきている比較的裕福な子どもたちと、“peauan

mit”などから通ってくる、ストリートチルドレンや貧しい家庭の子どもたちの間には距離があるように感じた。ストリートチルドレンたちは、あまりほかの子どもたちの輪の中に入っていこうとはしない。図書館に来て、自分たちだけで本を読んでいたりして、たとえほかの子どもたちが集まって工作などを行っていても、そこには参加しようとはしていなかった。また、ストリートチルドレンへ対してのほかの子どもたちの差別するような見方や接し方があるのも、否めなかった。そのような差別や偏見は、ますますストリートチルドレンが参加しにくくなり、図書館から彼らを遠ざけてしまうことにもつながってしまうのではないかと思う。

またSVA図書館は、子どもたちが学校が終わってから来る場所という役割もある。今、ヴィエンチャンでは子どもたちにドラッグの使用が広がっているという。子どもたちが、学校が終わってから来る場所があることにより、そのような危険から遠ざけることができる。また、それは同時に、貧しい地方だけでなく、都会であるヴィエンチャンにもまだ子どもたちが自由に來ることの出来る図書館のような場所が必要な理由でもあるのだと言えるだろう。

移動図書館（火曜日）

次に毎週火曜日に行っている移動図書館についてである。この火曜日の移動図書館はSVA図書館スタッフのミンチェンさんと、アルバイトである2人と、学校や施設へ行き図書館活動を行うものである。私はSOS Children's house と麻薬中毒者のためのリハビリセンター（some sange）への移動図書館に同行させてもらった。今年度は本来なら、他にもヴィエンチャン内の5つの学校と、障害者のためのセンターでも活動を行っているのだが、8月は夏休み中であったため行っていなかった。

SOS Children's house(SOS)

まず、火曜日の午前中にSOSへ行く。SOSにはさまざまな理由から親と暮らすことの出来ない生後3ヶ月から18歳までの子どもたちが暮らしている。また、施設の中には幼稚園と小学校が入っており、SOSで暮らしている子どものほかにも、外部の一般家庭で暮らしている子どもも通うことが出来るということであった。

SOSでは、ミンチェンさんが絵本の読み聞かせを行ったり、歌を歌ったりする他にも、簡単なゲームや折り紙などの工作も行う。また、本も貸し出しており、一度に200冊まで1つの施設に貸すことが出来る。また、その本の貸し出しなどのチェックはアルバイトの2人が行っている。

SOSではスタッフの方にいくつかの質問をさせていただいた。以下がその質問とスタッフの方の返答である。

1. SOSの子どもたちは、両親と暮らしていないことによるメンタルでの問題はあ
るか

特に大きな問題はない。あるとすれば、学校の外部から通ってきってくる子どもになぜ親
がいないのか、親がいないことについてどう思うかきかれることである。しかし、SOS
にはステップマザーといい、子どもの暮らす各家に母代わりの女性がおり、それぞれの子
どもの世話を見ているため、大きな問題は見られない。
しかし、もっと成長して大きくなってからメンタル面での問題は出てくることもあるかも
しれない。

2. 読書や本の読み聞かせ、絵を描くことなどの移動図書館での活動は子どもたちに
どのように働いているか。

移動図書館がくる前は本を読むことが好きでない子どもも多かったが、来るようになっ
てからは好きな子が増えた。また子どもたちは、学校以外の時間でも本を読むようになり、
本からそれまでは知らなかった文章や、言葉の使いかたなどを学ぶことができ、それが学
力の向上につながっている。

移動図書館の行う読み聞かせなどのアクティビティーも子どもにとって大変良い。しかし、
内容が十分でない。人形劇や折り紙などの新しいことも取り入れてほしい。以前に折り紙
なども行っていたが、継続でないと、子どもたちは忘れてしまう。

3. 図書館活動のような学校以外での教育は必要であると思うか。

必要である。

本を読むことにより、子どもたちは他の国のことや言語を学びたいと思うようになる。ラ
オスの子どもたちが読む本は、英語やタイ語、日本語などの本が多いため、他の言語を知
り、第二外国語としての選択肢を得ることが出来る。なぜならラオスには、観光客が多い
ため、外国語が出来ると彼らとコミュニケーションをとることが出来るようになるからで
ある

本を読むことにより、学ぶことが好きになり生活を向上させるきっかけとなる。また、み
んなで本を読むことは、みんなの心を豊かにし、幸せにすることが出来る。

以上がSOSでのインタビュー内容である。インタビューはミンチェンさんに図書館活
動のアクティビティーの時間を少し割いていただき、英語に訳してもらいながら行ったた
め、あまり多く多くの質問をすることが出来なかったのが残念である。また、SOSでは
施設の中の詳しいことには答えてもらえないため、やや限られた質問内容になってしまっ
た気もする。

SOSでも図書館活動では、同じようなアクティビティーを行ってもSVAの子どもた

ちとは違う反応が見られた。歌などを歌う場面でも、照れているのか慣れていないだけであるのか、少し控えめで、おとなしい感じがした。時間が経てばだんだん積極的に元気になってくるのであるが、そこに毎日のようにそのようなアクティビティーがあるSVAに通ってくる子どもたちと、SOSのように週に一度の時間しかない子どもたちの違いが見えた。ミンチェンさんもそんな子どもたちに合わせ、どのようにしたら子どもたちが積極的に参加してくるのかを工夫しながら行っているようだった。

SOSの子どもたちは限られた施設の中で暮らしており、娯楽や、新しいものを知るといふことにおいても、移動図書館はSVAに通ってくる子どもたち以上に大きな意味があるのではないかと感じられた。

麻薬中毒者のためのリハビリテーションセンター (some sanga)

午後は、麻薬中毒者(アルコール依存症の人たちも含む)のためのリハビリテーションセンターへ行く。移動図書館が活動を行う他の場所が子どもに対してなのに、some sangaでは青年から大人がその対象となる。そのため、SVAの図書館やSOSなどで行うアクティビティーなどは行わず、移動図書館を開くほとんどが、患者さんたちが自由に本を読む時間となっている。他には、絵を描いたり、アルファベットを並び替えるゲームなどを行った。

ここでも、スタッフの方に時間をいただき、ミンチェンさんに英語に訳してもらいながらインタビューを行った。以下がその内容である。

1. 何人の人々がリハビリを受けるために暮らしているのか

ホスピタル(移動図書館に参加できるまでのリハビリを受けた人たちが暮らしているところ)の中だけでも、57人が暮らしており、その中で女性は16人。そのほかにも、ドクターやナースなど13人が暮らしている。

またホスピタルのほかに、もっと重度の患者さんたち約460人が暮らしている。

2. どの年代の患者さんが一番多いのか

施設に入ってくるのは、15歳から。ラオスではそれ以下の子どもたちがドラッグを手に入れて使うことはあまりない。

上は70歳、80歳など何歳でも入ることができる。

3. ドラッグを使い始める理由は何か

それは大きく分けて3つある。

彼ら自身の問題で、どのドラッグがいいのか興味を持ち、友達を試したりして始める。

男性はドラッグを使うことにより、(女性に対して)自分自身をより強く見せたり、大きく見せたりしたいために、使い始める。

家族の中で問題がある。親の離婚や再婚で、家にいなかったり、両親の仕事が朝から夜まであり、家に人がおらず、一人で過ごす時間が多いとその時間をまぎらわしたりするためにドラッグを使ってしまう。他にも、状況や社会の問題で使い始める。

また、患者が施設にやってくるのは、ほとんどがその親によってである。その場合、親は子どもを心配して1,2週間に一度はホスピタルを訪れる。

しかし、まれにドラッグを使った子どもを邪魔者扱いし、家にはいらぬとして、罰のように施設に連れてくる親もいる。そのような場合、親が子どもを尋ねてくるのは4~5ヶ月に一度くらいしかないという。

他に、いくつかのケースで警察がグループで使っているのを発見し、警察で調査を行ったあと、施設に連れてくる場合もある。

4. どのようなアクティビティーが行われているのか

患者さんたちは毎日5時に起床、21時に就寝する。

朝、まずホスピタル内を掃除し、そのあと様々なチェックを行う。ホスピタルの周りでエクササイズしたあと、朝のミーティングがある。

木曜日には10人ほどのグループに分かれディスカッションを行う。各グループに1人のドクターが付き、その日に話し合うことをみんなで決める。

現在の自分たち自身こと、それまでの過去の話や、自分たちのプライベートストーリーをお互いに話しあい、意見やアイデアの交換を行う。

ディスカッションを持つことにより、患者さん同士が友達になったり、また自分たちの過去などを話すことにより、何が良いことで何が悪いことなのか患者さん自身で考えることにつながる。

また、患者さんが自分の言葉で自分のことを話し、話し合いの力も身につける。

他にも月曜から金曜まで（木曜を除く）の午後にもミーティングを持つ。

勉強をしたり、ポエムを書き、書いたものを交換しあったり読みあったりする。患者さんたちが物事を考えたり、想像したりするのを助ける。

他のアクティビティーとして、料理をしたり、ハンディクラフトを行い、患者さんたちが生活のことを自分自身で行うことができるように手助けをする。

スポーツなども行い、精神を強く、賢くする。

5. リハビリを行う中で移動図書館の活動はどのような働きかけがあるか

移動図書館が来ることにより、本をたくさん読むようになる。また、本を読み、新しいアイデアを持つことができる。

雨季の暑い時期になると、14時などの午後の暑い時間はスポーツなどのほかのアクティ

ビティーを行うことができないため、本を読んだりして過ごすことが出来る。
また、夜に寝付けないときに本を読んでもすごしたりすることも出来、移動図書館が来ることは患者さんたちの生活を様々な面で助けている。

6.他にどんなアクティビティーが必要であると思うか
(移動図書館で他にどのようなことを行ってほしいか)

スポーツやゲームなど、また学習ゲームを行ってほしい。
エクササイズすることは、身体を強く、健康にし、また体を動かし、楽しむことによりドラッグを忘れることが出来る。

移動図書館は週に一度だが、十分であるか

週に2~3度来てほしい。お昼過ぎの暑い時間は何もすることがないと寝て過ごしたりしてしまうから。

以上が、私の質問に対しての返答であるが、質問内容以外にも以下のようなことについてもお話をしていただいた。

・Some sanga では、ホスピタル前のもっと厳しい中でのプログラムがまず42日間あり、またそのあと6ヶ月間施設の中で暮らす。以前は2ヶ月であったが、またドラッグを使い戻って来てしまう人が多かったため、6ヶ月に伸ばされた。
そのあとでも、まだリハビリが不十分である人は施設に残る。
長い人では2年、また2年以上リハビリを受けながら暮らしている。

・Some sanga を出た人たちの80%は、良くなり社会に戻っていくが、20%に人たちが再びドラッグを使い戻って来てしまうという。

・また、施設にいる人の中で何人かの人は大変不安で緊張しやすい状態になってしまい、自分自身では何もすることが出来なくなってしまう。
このようになってしまう人の多くは、家族内に問題があった人たちで、人とのコミュニケーションをうまくとることができない。

・また、現在Some sanga では薬代など、費用の90%を患者さん自身が負担しなければいけない状態になっている。残りの10%だけを無料で提供している。
資金が足りず、リハビリにはもちろん、施設のことを広告することへもお金をかけることができず、人々に施設のことを知ってもらうことができない。そのため、ドナーを探すことも難しい。

・施設の中では、現金は使われない。持ってきた現金を施設内だけで使えるチケットに代える。お金を持っていると、お酒やタバコ、またドラッグなどを手にいれることが出来てしまうから。

・逃亡しようとしたり、何か悪いことをしたりして、それがドクターなどに知られると、罰としてホスピタル内を掃除したり、草刈りをしたりなどの仕事を与えられる。

以上、スタッフの方にお話していただいた内容である。

some sanga では、彼らが以前はドラッグを使っていたとは想像できないほど明るく、積極的であった（というのは、私が麻薬使用者に対しての偏見を持っているということかもしれないが）。

患者さんの中の多くの大人たちは、子どもの頃学校以外の場所で本を手にする機会などまだなかった方たちであるからなのか、一生懸命に読んでいる姿が印象的だった。またそれは、青年のような若い人々にも言えることで、彼らもまた絵本のような本に食い入るようになって読んでいたり、ゲームなどのアクティビティを子ども以上に楽しそうに行っていた。

ここでの移動図書館の活動は、ここで暮らす人々にとっては楽しみにしている娯楽の一部であるのではないかと思う。部落のように、ある意味隔離された中で暮らしている彼らには、時間がたっぷりあるにもかかわらず、楽しんで行う何かというのは、まだ少ないのではないかとも感じた。インタビューを行ったドクターの方もおっしゃっていたが、彼らにはドラッグ以外にも楽しいことがあるということ、ドラッグを忘れられるような存在が必要で、移動図書館もその1つである。子どもと違い、大人である彼らは、それまで1人1人が歩んできた道も違えば、年齢も違い、その背景にあるものも子ども以上にさまざまであるのだと思う。そのため、移動図書館の活動や、また本を読むという機会があることも、ある人にとっては娯楽であったり、ある人にとっては勉強であったり、1人1人にとって違う意味があるのではないかと感じた。

ドクターだけではなく、患者さんの何人かにも話を聞くことが出来れば、もっと多くのことが学べたのだと思うが、時間の都合や、言葉の違いもあることはもとより、私の計画性なさもあり、そのような機会を作ることが出来なかったのが反省点である。

移動図書館（土曜日）

土曜日の夕方に、もう一つの移動図書館が行われる。こちらは、タートルアン広場に行っているもので、火曜日の移動図書館がある施設の特定の人々に行われるのに対し、タートルアンでは誰でも自由に参加することの出来る、全ての人を対象として行われているも

のだ。

土曜の夕方5時半ごろから8時ごろまで、観光地でもあるタートルアンの前の広場の、一角で敷物を広げ、電気をつけ、移動図書館は行われる。

ここでも、SOSへの移動図書館と同じように、絵本の読み聞かせ、歌、ゲームなどが行われる。ここで違うのは、誰でも参加することができ、それぞれの子どもたちが違う家庭から来ており、みんなが友達同士ではないということ、またその子どもたちと一緒に彼らの親も参加している。

タートルアンでの移動図書館は、子どもたちに本を読んだり、アクティビティーに参加する機会を与えるという役割のほかに、SVAへの活動を広めていくという広告の役割がある。限られた人々だけでなく、もっと広い範囲の子どもたちをはじめ、また親にも移動図書館をきっかけにSVAの活動を知ってもらい、移動図書館だけでなく、SVAの図書館にも来てもらうためである。SVAは他にも広告方法として、テレビや新聞を使っている。新聞は以前は、“Vientiane times”だけであったが、英語で書かれているため、ラオスの裕福な人たちや、商売の中で新聞が必要となる人々しか読む機会がなかったため、現在はラオス語の新聞にも載せるようにしているということであった。しかし、貧しい人々はラオス語の新聞であっても読む機会がなく、そのような方法で情報を得ることが出来ない。どんな人々にも、SVAの活動を広めるためには、移動図書館のように誰にでもひらかれる場所が必要なのだと言える。また、他にも大きなイベントなどが開かれるときに、ブックレットを配るという広告方法も取っている。

タートルアンでの移動図書館は、私にとって大変興味深いものであった。子どもに対してはもちろん、その子どもたちに親なども本を読み、アクティビティーに参加したりなど、多くの方が対象になっており、来ている人々もさまざまであった。しかし、タートルアン広場で遊んでいても、参加していない子どもたちも大勢おり、(もちろん無理に参加させることでは意味がないが)参加しない子どもたちへも何か興味をわかせるようなことが出来ればな、と感じた。しかし、開かれた空間で行われるため、初めてその活動を知った人でも、SVAの図書館へ初めて行くよりも参加しやすい空気であるとも思った。また、広告方法であるが、現在はチラシやブックレットのように文字やものとして活動を広めるものがなかったので、早くまた配られるようになればよいと思う(以前は配っていたということなので)。

私が研修へ行く前から、もっとも見てみたいもののひとつであった移動図書館だが、雨が降ってしまったりと、十分に見ることが出来たのは1度しかなく、もう少し見てみたかったというのが正直な感想だ。

青少年事業(ユースボランティア)

研修の最後の2日間でユースボランティアの行うターカイ村へのホームステイにも一緒に参加させていただいた。

ユースボランティアは、高校生や大学生など約30人ほどからなっており、1年間SVAのボランティアとしてキャンプや学習会、またイベントなどを行う。ラオスには、日本の課外活動のように、学校のカリキュラムの中に、社会のことを学ぶ機会や、社会の問題や、またその問題に対しての活動などを行うことがないという。ユースボランティアは、図書館活動のほかにも、そのような社会のことを学ぶ場所でもある。

ホームステイは、1泊2日でSVAから2時間ほど行ったところにあるヴィエンチャン内のターカイ村で行われた。ユースボランティアは、図書館活動としての読み聞かせなどのアクティビティーのほか、食事を作り、キャンプファイヤーなどを行う。

このホームステイでは、私も多くのことを学ぶことが出来た。ホームステイがヴィエンチャン内の村で行われる理由として、ユースボランティアに同じヴィエンチャンの中でも場所によってはこの村のような場所がまだ多くあるということを知ってもらうため、ということがある。私自身、この村へ行ってみてもそれが同じヴィエンチャン内であるということが信じられなかった。

図書館など、本を読む機会がないのはもちろんのこと、村にある学校の校舎は、出張に同行させてもらったときに見た地方の村の学校よりも、はるかに不十分だと言える校舎であった。また、図書館活動を行う中で、大人でも、もしくは大人であるからか、本を初めて見る、触るという人も多くおり、大人が興味深そうに本を手に取り、子どもたち以上に夢中になって読んでいる姿が強く印象に残っている。

また、図書館活動以外でも、その村に行くまでの道のりの中で、雨のせいで道がぬかるみ車では通ることができず、トラクターを使い村へ向かうことになったりと、私の想像していた以上にそこは「村」であったように思う。

このホームステイに参加して、ユースボランティアをはじめ、私自身もなぜSVAがヴィエンチャン内で図書館活動をするのか、という理由がよくわかった。何か支援をしようとするとき、人は貧しい地域や、周りのことばかり見てしまう。もちろん、そのような地方にも支援は必要である。しかし、だからといって、自分たちに近いところ、今回で言えばヴィエンチャン内であるからといって、支援が必要ないというわけではないのだ。近い地域のことであっても、奥を見てみれば、まだ本も手にしたことがない、本の重要性を知らない人々は多く存在している。

私はヴィエンチャン＝都会であるというイメージを持ってしまっていたので、研修の最後にこのホームステイで村へ行けたことは大変貴重な経験となった。

「ラオスのこども」訪問

SVAの活動を見るほかにも、「ラオスのこども」(以下ALC)を訪問し、赤井さんにお話を伺った。

ラオスのこどもとは・・・

1982年より活動を始めた日本のNGOである。子どもが自ら学ぶ力を伸ばしていくために、ラオスで「絵本、紙芝居などの出版」、「図書館」、「集い楽しみ学べる場」などの支援を行っている。

ALCでは、Children Culture Center(以下CCC)の支援を行っている。CCCは、図書館を含む他にも子どもが文化を学ぶための講座などを開いている。今回のインタビューでは、このCCCの活動の中心にお話を伺った。

ALCの支援するCCCは(CEC・CDCも含め)ラオス内に現在9箇所ある。CCC(Children culture center)とCEC(Children's Education Development Center)があるが、名称が違っただけで活動の内容はほぼ同じである。またそのほかに、個人が行っている小さな規模のCDC(Children's Development Center)がある。それらは、教育局が管理しており、スタッフも教育局から来たラオス人スタッフである。ALCのスタッフは常駐おらず、プログラムの作成なども教育局が行っているが、費用のほとんどはALCが支援している。

CCCでは、絵画、伝統音楽、伝統舞踊、歌、ゲーム、編み物、織物、英語、演劇、彫刻、工作、粘土、人形劇、スポーツ、料理、詩、読み聞かせ、などの講座を行っている。

以下が、インタビュー内容である。

・CCCで開かれている講座について

まず講座の数であるが、場所によっても違い、またそのときの先生の都合や、また短期のものなどもあるので決まっているわけではない。ヴィエンチャンの場合は平均すると6～8講座ぐらい。講座の中でも子どもたちの進み具合によって、初級、上級のように分けたりして、グループが入れ替わりながら行われている。しかし、それもはっきりとは決まっておらず、プログラムの内容も柔軟である。(赤井さんの言葉で言えば、いい意味でも悪い意味でもいいかげん。もっとちゃんとプログラムを作ったほうがいいとも思うし、でもそのいいかげんさ(のんびりさ)がラオスっぽくていいのではないかとも思う、とのこと。)

活動に参加している(講座を受けている)のは、5歳から16、17歳くらいまでであるが、その子たちが兄弟を連れてきたりするので、もっと小さい子たちも来る。特に多いのは、小・中学生(12,3歳)で、もっと小さい頃から来ていた子たちが成長しても来ており、そのためその年代の子たちが多い。

・ C C Cに来る子どもたちについて

SVAに来る子どもたちにも、ストリートチルドレンがいたり、家庭環境の違いが見え、そのことについていくつか考えるところがあったので、子どもたちの間に貧富の差などは見えるか、ということについて質問をした。

子どもたちの貧富の差などは、よく見るとあるが、一見わからない。センターにくる子どもたちというのは、基本的に生活に余裕のある中流の子どもたち。もっと貧しい子たちは家の中の手伝いや商売をしなくてははいけないため、遊びにいく余裕はない。また逆にもっと裕福な子どもたちは、センターなどではなく塾のようなスクールに通うので、あまり来ない。そのため、センターに来る層というのは限られている。

ストリートチルドレンの子どもたちも図書館のような自由に参加できる場所には入ってくるが、講座に参加したり、他の子どもたちに混ざっていることはあまりない。また、現在ヴィエンチャン全体で経済力があがっており、お金を持つ人も増えてきているが、その反面貧しいままの人たちもいて、格差が広がっている。

しかし、生活に余裕があり、裕福だからといって、子どもたちみんながC C Cが行っている講座のようなことが学べるわけではない。貧しい層に関わらず、どのくらいの層の子どもたちでも、そのようなことに触れる機会は少ない。

C C Cの活動も、その社会の変化、経済格差の中で対応し変わっていく必要があり難しい。

・ 町のC C Cと地方のC C Cの違いについて

C C Cにも大きな規模のものと小さな規模のものがある。

大きなものは、ヴィエンチャン・ルアンパバン・ポリカムサイ・サイニャブリーの4つ。これらは県の文化センターで、県の中心にあることなどにより、大きな規模となっており、10講座以上が開かれているところもある。これらの大きなところは、子どもの数は多い。しかし、来たいと思っている子どもたちはまだまだ大勢いるが、受け容れられる数は限られており、余裕はないのが問題。

次に地方にある小さな規模のものは、郡が運営を行っており、大きなところに比べると規模は下がり、予算も3分の1くらいになる。そのような地方のセンターでは、人数に対しての規模的には問題はないが、スタッフ、また子どもたちに教える人材が足りていない。伝統舞踊のように昔からあるものを教えることはできても、他の歌やゲーム、絵などの新しいことを教えられる人がいない。

また、地方の子どもたちの中には、家庭の中での仕事を行わなければならないため、C C Cのような場所にくることが出来ない子どもたちも多くいる。

・ 図書館のような知的発達のようなことのほかにエアロビなど、体を動かす講座を始めた

ことについて

エアロビクスは子どもたちの中から自発的にやりたいという声があがり、始まった。場所によっては、サッカーやバドミントンなどを取り入れているところもあり、それぞれのセンターが各自で出来ることを行う。

ラオスのほとんどの学校では、体育の授業がなく、体を動かして自己表現できる機会があまりない。また体育だけに関わらず、音楽も絵も自分を表現することの一つである。

また、あるセンターでは英語の講座を取り入れたところもある。CCCのイメージとは違うかもしれないが、学校で教わる英語のように堅いものではなく、コミュニケーションのひとつとして、簡単なものだけでも学び、子どもたちの世界が広がり、知る、学ぶことにつながればいいのではないかと、という理由から行っている。また、大人に向けての英語のクラスも行うという案もあり、実際に行われたところもあったが、今は先生の問題もあり、行われていない。また、大人に対しての英語講座を行う場合は小額でも講座料をとって行うようにしている。

・これからの活動について

ヴィエンチャンは経済発展などもあり、変化が激しくなっている。そのため、現在の課題は、来られていない層の子どもたちにどのように、広めていくか。そのためには情報のアクセスが必要であるが、具体的にはまだ策は進められていない。資金の問題があり、スタッフも足りていないため、そこまで手がまわせていない現状。

またCCCにいるスタッフも経験が浅く、育ちきっていないのが問題。

CCCは教育局の管轄のため、限られてくることもあり、CCCの場所を使って活動していくのも検討するべき点である。

現在、センターなどに来られない子どもたちにも活動を広めるために、センターに来る中学生くらいの子どもたちを連れてヴィエンチャン郊外に、1日または半日行って、歌ったり遊んだりするミニイベントも行っている。継続的に同じ場所で行うわけではないが、それが広がって、自分たちの場でもそのようなことをやってみようという働きが生まれるかもしれない。そのため、場所を限るのではなく、様々な場所でポイント的に行っている。中学生など今まで受ける側であった子どもたちが今度は違う子どもたちに読み聞かせを行ったりすることによって、与える側になることによってまた学ぶことがある。

CCCの中では、楽器などを使わない歌などみんなで出来ることも取り入れていく方向。CECの中では教員研修も行われているが、その教員研修を生徒と教師の境目のないものにしていく。ラオスでは、大人は大人で子どもは子どもであり、大人と子どもは分けられることが伝統的にあるが、教師が研修にきたらそこに図書館があり子どもたちがいるのが当たり前であり、教師というのは子どもに関わる職業なのでからそのような考え方は変えていくべき。

だからCCCでは、教員研修が2階で行われていても、1階で図書館を空けて子どもたち

が遊んでいるようにしている。

また、赤井さんにはALCの活動内容に関する事以外にも、ラオス、特にヴィエンチャンに住む子どもたちが抱える問題、また日本の子どもたちとの比較などについて、私が興味を持っていたことから、そのことについてもお話をうかがうことが出来た。

以下がその内容である。

・ラオス（ヴィエンチャン）の子どもたちはどのような問題を持っているか

大きな問題が麻薬が広がっていること。麻薬が身近にありすぎて、誰でも手軽に入ってしまうため、危険だという意識が社会全体的に低くなっている。社会の状況がそうだという事は、子どもたちの心理にも同じような影響がある。

また、それと同じく隣国のタイへの出稼ぎも、数が多く身近にあるために、それ自体への抵抗感が低くなってしまっている。

しかし、それは子どもたちが変わってきて問題が生まれているのではなく、社会が変わり、大人が変わり、それを写す鏡として、子どもも社会に合わせてかわってきているのである。

日本の子どもたちも、現在様々な問題を抱えていると言われている。ラオスにいる日本の子どもたちは、ほとんどがインターナショナルスクールに通い、多くのラオス人の子どもたちと触れ合う機会はあるにない。しかし、ラオスにいる日本人の子どもたちは、日本にいる子どもたちよりも、自然に、子どもらしくいきいきとしている。日本の子どもたちに問題があるのではなくて、日本の社会に問題があり、子どもたちはそれに対応しているだけなのではないか。

・ラオスと日本の子どもの違いについて。

最も違うところは、ラオスでは、違う年齢の子どもたちが一緒に遊ぶのが普通であり、1つの年に限られることがない。上の子が下の子の面倒を見ていたりするのも当たり前の光景である。しかし、日本はいろいろな歳の子どものいるところでも、同じ歳の子たちが固まって遊んでいる。

幼稚園などでは、縦割りで行うところもあるが、それはその場だけで、あまり意味がない。しかし、日本からラオスに来ている子どもたちは、日本語補習校などでいろいろな年の子どもが集まり勉強しており、みんな自然と年が違う子どもたちと遊んでいる。それは慣れからくるものでもあり、日本の社会の中がそういう風になっているから、子どもたちも自然とそうなるのである。また、ラオスでは小学校でもいろいろな年の子どもがいる。入学が遅かったり、留年してしまったりで、いろいろな年がいて当たり前、そして日本はみんなが一緒に当たり前である。

・ ノンフォーマルな教育について

C E Cの施設を初め、ノンフォーマル教育というのは、情報にアクセスする機会があまりないラオスの中でのアクセスのひとつの手段である。外に出て、外を知り、考えることが普段の生活の中ではあまりなく、それではラオス自体のこともあまりよく見ることができない。新しいことを知ることにより、よりラオスを知り、いいところを知り、またこれからどうしていけばいいのか自分たちで考えていく、きっかけとなるのではないか。また、本を読んだり、場所を与えたりしてきっかけを作ることにはできるが、そこから先で何を得ていくのかは子どもたち次第。

ノンフォーマル教育は、きっかけは与えられても、その先を与えてばかりでは意味がない。与え続けてはいけないし、また作られたものを与えても意味がない。

日本では読書嫌いな若者、子どもが多いというが、その理由のひとつは学校が作っているのではないか。学校は宿題で出す読書感想文や、読書週間は子どもたちに読書することを強制しており、強制されるから、子どもにとって読書がいやなものになってしまっているのではないだろうか。

ノンフォーマル教育は、人の心を豊かに、人生を豊かにしていくには必要であるが、その方法が間違っただけでは反対の方向へと進んでしまう危険性があるだろう。

以上が、A L Cで赤井さんにインタビューした内容である。

インタビューを行ったあと、実際にC C Cへ行き、子どもたちが講座を受けている様子を見学させていただいた。また、このときはちょうど、A L Cにもインターンとして日本の大学生が来ており、彼女たちが子どもたちにリコーダーを教えていた。

実際に活動を見せていただいたが、A L Cに通ってきている子どもたちは、講座のないようによっても違うのかもしれないが、中学生くらいに子どもたちが多いようであった。A L Cは講座という形を取っており、それは子どもたちが将来について考えるとき、影響があるのではないだろうか。日本においても言えることであるが、学ぶ内容が選べるというのは、同時に自分の将来の選択肢が広がるということでもあると思う。特に情報へのアクセス方法があまりないラオスでは、A L Cでの活動は子どもたちにさまざまなことを考えるうえでのきっかけを与えており、可能性を広げているのだと感じた。

赤井さんからお話を伺ったことは、私の研修テーマについてはもちろんのこと、ラオスでの問題を通し、日本の問題も見えてきたりと、さまざまなことに対して考えるきっかけとなり、大変感謝している。

Peuan Mit

Peuan Mit では本来ならスタッフの方にインタビューさせていただき予定だったが、スタッフの方が多忙であったため、都合が合わなくなってしまい、施設の中を見学さ

せてもらい、資料をいただくことだけとなってしまった。

Peuan Mit の中には、子どもたちが生活する場所以外にも、勉強やアクティビティーを行う部屋もあり、子どもが学校へ行けるように支援しており、現在は Peuan Mit で暮らす子ども全員が学校へ通っているという。また、はっきりとしたことはわからないが、見た限りでは暮らす子どもたちは、小学生くらいが多く、中には 1 歳から 2 歳くらいの子もたちもいた。

また、ラオスの子どもたちは、家庭があるが、ストリートチルドレンのなっている子どもが多いということで、家族の問題を解決し、子どもが家庭に帰れるように、Peuan Mit が間に入り、話し合いなどを行っているという。

SVA の図書館にも Peuan Mit から子どもたちが来ることが多いのであるが、なかなかこちらに心を開いてくれないように感じたが、Peuan Mit へ実際に行き、子どもたちと会ってみると、大変人なつこく、近寄ってきてくれたのに驚いた。SVA の図書館ではそのようなことがなかったのは、まだ SVA の図書館が彼らにとっては、まだ居るべきところだと感じていられていないからではないのかと思った。

今回はあまり調べることが出来なかったが、ストリートチルドレンの教育問題はまだまだ大きなものであると思う。これからの課題として、自分でも調べてみたいと思っている。

研修のまとめ

研修のまとめとして、まず研修テーマについて述べたいと思う。

私の研修テーマは「学校以外での教育の場のひとつとしての図書館活動の位置づけ、また活動が子どもたちに与える影響、その必要性について」であった。

まず、図書館活動の位置づけであるが、これは正直に言えばはっきりとはわからなかった。それは、図書館活動が対象とする相手により、その意味あいや、位置づけも変わってくることもあり、また同じ場所で同じように活動を行っても、その受け止め方は 1 人 1 人によっても違い、ある子にとっては勉強の場のひとつであり、ある子にとっては遊びであったり、ある子にとっては友達と会う場所でもあるのだ。しかし、1 人 1 人によって違うからこそ意味があるのであるとも感じた。学校は多くの友達にとって勉強する場所であるのかもしれないが、図書館というのは好きなことを自由に行える空間であるのがもっともよいのではないだろうか。

子どもに与える影響も、また 1 人 1 人によって違うというのが大きい。私は、研修を始める前、図書館活動というのは学校での机の上での勉強とは違い、子どもたちの心に対する教育であるという部分が大きいのではないかと思っていた。もちろん、その一面もあると思う。しかし、図書館活動は何よりも、子どもたちに多くのきっかけを与えているのだと思った。それは、彼らが新しい言語や文化を始め、あらゆることにおいて世界を知ることのきっかけであったり、何かを学びたいと思うことのきっかけであったり、またそ

それは結果的に彼らの将来の選択の幅を広げることにもつながるのではないかと思った。ALCの赤井さんのインタビューの中にもあったが、新しいことを知るにより、その学んだこと以上に新しいことが見えてくるようになるのだと思う。情報にアクセスする機会が限られているラオスであるからこそ、図書館活動というのは、ますます子どもたちにとってあらゆる面できっかけを与える役割をしているのではないだろうか。

必要性としては、一言で言ってしまえば必要性は大きいということだ。図書館活動のような学校以外の教育、ノンフォーマル教育は、生きていくうえで必要不可欠なものではないかもしれない。しかし、人生を豊かに、心を豊かにしていくためには欠かせないものではないだろうか。

そのひとつとして、本を読むことや、また図書館活動が必要であるのだと思う。しかし、何よりも、子どもをはじめ大人までもが、移動図書館が来るとうれしそうに駆け寄ってきたり、またそこで本を夢中になって次から次へと読んでいたり、そのような姿そのものが図書館活動の必要性なのではないか、と感じた。

感想と反省

1ヶ月の研修は本当にあっという間であった。その中で学び、得たものは研修内容以上のもので、実際に行き、そこに暮らす人々と関わらなければ見えてこない多くのものがあるということ、身をもって学ぶことが出来た。

しかし、それと同時に反省すべき点も大変多くあった。まずは、健康管理のことである。研修の前半は度々腹痛を起こし、スタッフをはじめ、周りの方々に心配と迷惑をかけてしまったことは何よりも反省しなければいけない点である。また、研修内容についても、事前の勉強が足りなかったことがまずあげられる。ラオスの国の状況についてはもちろんのこと、教育のシステムや、カリキュラム、また現地のNGOのことなど、事前に調べていればもっと多くのことが1ヶ月の中で学ぶことが出来たと思う。もうひとつの反省は、研修テーマに具体性が欠けていたことだ。誰に会い、どこへ行き、何をみて、何を知りたいのか、そんな基本的な部分から足りていなかったように思う。また、特に前半はなかなか自分がどのように行動したら良いのかわかっていない部分も多く、もっと計画性を持ち、積極的に行動することが出来ればよかった。

しかし、多くの反省点はあるものの、私が当初の目的としていた図書館活動については実際に子どもたちと触れあいながら調べていくことができ、多くのことを学べた。もともと子どもすることに興味があり、実際に子どものいる中で研修を行いたいと思っていた私にとっては、今回の研修では、多くの場面でそのような機会を作ってもらい、大変感謝している。また、同時に子どもの問題は直接子どもに関わる中でしか学べないものであり、これから学んでいくうえでの課題なども見つかった。

また、ラオス事務所のスタッフの方々にも大変感謝している。研修内容についてはもちろんのこと、ラオスで生活するうえでのあらゆる面においていつもの確かな助言をしていた

だいた。また、自分で行わなければならないところは、自分自身でやるということも、学ばせてもらった気がする。近すぎず、遠すぎず、そんな距離で見守ってくださったおかげで、より多くのことを学ぶことが出来たと思っている。

今回の研修が、これからの私の学生生活、また人生において大きく影響してくるのは間違いない。今回学んだことをスタートとして、これから学んでいきたいと思う。